朝日新聞　２００２年９月２０日　第3種郵便物認可

ニッポン見聞録

Jeans

具志アンデルソン
（ブラジル）

日本語話せず、帰りたかった

僕は78年にブラジルのサンパウロで生まれた日系３世です。父が日本に働きに行って８カ月後、「日本はいい国だよ。皆も来なさい」と電話がありました。13年前のこと、家族全員で来日しました。

正直、不安でいっぱいでした。どんな国なんだろう？　日本人は、皆金持ちで空手がすごく強いイメージでした。日本に着いたのは89年２月15日午後１時30分。今でもはっきり覚えています。

日本での生活は、本当に苦労しました。言葉が話せない、食べ物も違う、友達もいない、本当にこんな国で生活していけるのかと思いました。

そう考えているうちに僕もある工場でお手伝いをすることになりました。10歳でした。間もなく津市内の小学校に行くことになりました。日本語は何も話せません。ただ母から「返事をする時、ハイと言うように」と注意されていました。

友達からよく殴られたこともあります。僕はある日、母に言いました。「ブラジルに帰りたい、１日でも早く帰りたい」。ブラジルに帰れば本当の友達が僕を待っていると思いました。

きっと異国でこんな悩みを抱えている外国人の子どもたちも多いはずです。今、僕は、自分の経験を振り返り、津や松阪市で彼らの教育相談員として働いています。

（外国人児童生徒教育相談員）